

寿命より長い時間軸の仕事

5月に公開された映画「WOOD JOB! OB〜^{かひら}神去なあな日常〜」を見ました。受験に失敗し、目標を失った高校を卒業した青年が、職業研修で行った山村で林業に目覚めていく物語です。これまで林業がテーマとなった映画は見たことがありませんでした。

その中に象徴的な会話がありました。「今切っているのは祖父が植えた木。自分が植えた木が材として使えるようになるのは孫の代」。自分の寿命を超える長い時間軸で仕事をすることとは、現代に生きる私たちにとって不思議な感覚です。ただ、目先の結果だけで考えてはならないということは、人を育てるとして教育の仕事にも共通している気がします。

映画では、主人公の青年が逃げ帰ったい衝動にかられながらも、村の人々と自

はぐくむ 「WOOD JOB!」

然の崇高さに包まれて変わっていく姿が描かれています。キャリア教育的に言えば、「きっかけなんてどうでもいいからホンモノと思ふものに飛び込んでごらん」というメッセージでしょう。

青年と同じように、林業に飛び込んだ卒業生がいます。先日彼から、5月に行われた「伐木チャンピオンシップ」という競技会で準優勝したというメールが届きました。チェーンソーの技を競う大会で、9月にスイスで開催される世界大会にも出場が決定しました。10年前に自由の森学園を卒業し、カナダで生活していた今井陽樹君。帰国後は群馬県の森林組合に勤めています。カナダの森林に魅せられて、森に関わる仕事をしたいと考えたそうです。

この春に卒業したD君らが、森林に関

わる勉強をしようと、大学入試前に今井君をたずねました。今井君はD君らを現場に案内しながら、林業の現状と自分の夢について話しました。D君は衰退していると言われる林業に対して、今井君が生きがいや希望を感じていたことが印象深かったそうです。「林業を若者の憧れの仕事No.1にしたいね」と今井君は語りました。林業に進む決心をしていたD君はとても励まされました。

さらに今井君は語っています。「きこりが木を切らなければ、日本の木の文化が無くなってしまふ。日本人は日本の木を使うことで心を養う。例えるならばご飯とみそ汁だね。輸入材はハンバーガー。国産材はご飯とみそ汁。日本人の心はハンバーガーじゃ養えないでしょ?」。林業という仕事は自然や文化を支えることにつながっているのです。

（自由の森学園理事長

鬼沢真之）